

- 国語科の授業のアイデアを広げたい!
- 具体的な実践事例を知りたい!
- 授業の導入に使える小話はないだろうか?

そんな先生方のために、秀学社国語科通信シリーズをスタートします。

振り返りの「質」と「活かし方」

北海道教育大学附属札幌中学校

鈴木 真之介

振り返りの「質」を向上させる

今回は、生徒の思考の状況や目標に対する達成度などを把握することを目的とした、Assessmentとこの「振り返り」について注目しました。この生徒の「振り返り」の質を向上させることは、教師が学習状況をより適切に把握することにつながります。

ただの感想に終始してしまったり、「とにかくたくさん書けばいい」という捉えでいたりしては、その目的は果たせません。そこで、次のようなステップを伝え、意図的に「振り返り」指導を積み重ねていくことが有効です。

- I この学習でできたこと(得たこと)、だけではなく、できなかったこと(得られなかったこと)についても具体的に書く。
- II Iの理由や原因、思い当たるきっかけ、得たものは今後どう使えるかななどを具体的に書く。
- III 次の学習では、何をどのように考える必要があるか、そのためにはどのような学習活動が必要かという「見直し」を具体的に書く。

このステップを眺めてすぐにお気づきだと思いますが、重要なのは「具体化する」ということです。「学習のまとめ」のように捉えるのではなく、記述には抽象化が必要だと思われるがちですが、具体的に語られなければAssessmentすることができないのは、左の記述例AとBを比べてみても明らかです。もちろん、生徒の実態や発達段階に応じて問いかけ方の工夫が必要になります。

なお、北海道教育大学札幌校の幸坂健太郎准教授(国語教育学)は、このような記述の深さを氷山に見立てて図示しています。明示的に指導する際に、非常に効果的です。

詳しくは下のQRコードをご参照ください。



記述例

A 今日の学習ではいろいろなことが分かった。もっと頑張らって追究したい。

B 今日は「僕」の心情の変化と山場に注目して、ちょうを盗んだあとの強い不安が読み取れた。次はその不安を踏まえてセリフの意味を考えたい。

振り返りの「活かし方」

学習の状況を適切に把握できることには、様々なメリットがあります。第一に、生徒自身が自分の学習の「舵取り」ができるようになることです。

左下の写真は、授業中ではなく、授業開始前の休み時間の様子です。ICT環境の整備に伴い、「振り返り」は全てGoogle Formを用いた形で運用しており、入力された記述に目を通すと同時に、記述内容を全員に返却することになっています。これは、学習のねらいに対する現在地を、生徒自身が意識するためです。また、前項Ⅲのステップを踏むように継続指導しているため、このあとの授業で何をすべきか、何をしたいかが生徒自身の中で明確になります。

この写真では、前回の学習を事前に思い起こし、次の学習での方向性を確認している様子が伺えます。もし、「先生、今日は何をやるんですか?」という問いがあれば、それは学習が教師主導のものとなっている証です。生徒自身が学習の主導権を握るきっかけとなること。これがメリットの一つ目です。

二つ目のメリットは、教師が自分の授業の「評価」を行い、これからの授業プランの軌道修正を図ることができる点です。何に気付いているかを

「みとる」ことは、これからの授業で何に気付かせる必要があるかが明らかになるということです。また、生徒による今後の見通しを適切に把握しておくことは、必要感や困り感に応じた授業展開をつくる上でとても参考になります。

国語科は、学習対象がそもそも抽象度の高い「言葉」であるがために、何ができるようになったか、どんな力が身に付いたのが曖昧になる傾向があります。「結局、国語の授業で何ができるようになったか分からない…」という声を一つでも減らすためにも、学習に対する「評価」を大切にしていく必要があります。

前回に引き続き、「じまび」Assessmentとしての「評価」について考えてきましたが、この蓄積はさらなる「活かし方」につながります。それは、「Evaluation」としての「評価」に活用できるということでした。次回からは、「振り返り」をもう一つの範囲へと発展していく方法について考えてみます。



【編集部がつばやき】 文学を歩む

大阪出身の文豪、織田作之助。高校生の頃、織田作之助の『雨』を学んだ。登場人物の心情が生々しく表現された湿っぽい作品で、高校生の自分には小難しい話だった。しかし学習の最後に「文学踏査」と題したフィールドワークを行い、『雨』の舞台となった上本町から道頓堀までを練り歩くと、登場人物の感情、作者の思い描いた風景が自然と舞い降りたような感覚になった。生國魂神社を訪れた際には、豹一と紀代子が落ち合う様子が目に浮かんだ。このように、文学作品の場面の情景を自分の目で確かめることで、作品への理解をより深めることができる。近年、アニメや漫画の「聖地巡礼」が話題だが、「文学踏査」も同じだ。足を踏み入れたら、そこはもう「作品の中」なのである。(編集部：野原)

秀学社 国語科 LINE公式アカウント

コクカフェ

▼役立つ情報を配信します。
ぜひご登録ください。

